



物語の例

不思議な風船

木村 絵美

まどから見える空は、今にも奈々^{なな}をおしつぶしそうになるほど重く暗い。今日、小学校最後の運動会の練習が始まった。練習方法をみんなて決めるはずだったのに、やっぱり夏希^{なつき}ちゃんが決めたことにしたがうだけ。みんなあとで文句ばかり言うのに。

ふとんにもぐり、いやな気持ちとけんめいに戦ってみるが、すつきりしないまま土曜日の朝をむかえた。

今日は、家族で久しぶりに街に出かけた。多くの人が行きかう交差点で、奈々は真っ赤な風船をふいにわたされた。

「私、いりません。」

「まあ、だまされたと思って。さあどうぞ。これは勇気がほしい人にしか見えない風船です。」

風船を持った女性^{おんな}は、ロもとに人さし指を立てて、ないしょのポーズをとった。そして風船のひもを、奈々の左手の小指にくくりつけた。

買い物のあと、奈々は同級生の真帆^{まほ}の家に向かった。真帆の家には「チチ」というゴールデン・レトリバーがいる。奈々は犬がきらいだ。インターホンをおすと、真帆よりも先に大きな茶色のかたまりが飛び出してきた。にげようとしたが、小指にからまった風船が、その場から動かない。奈々が固まっていると、不思議なことに、左手の風船が、奈々の手をチチの頭の上に引っ張るように動いた。奈々の手はチチの頭にふれた。「あったかい。」奈々はいつのまにかチチの頭をなでていた。

真帆の家から帰るとちゅうに小学校がある。友達が鉄棒^{てつぼう}の近くで遊んでいた。奈々はいまだに逆上がりができない。鉄棒なんてしたくないのに、左手がまた勝手に動きだした。鉄棒の前まで来ると、「やってみようかな。」不思議とそう思えた。冷たい棒をにぎりしめる。いつもなら両手^{りょうて}に力を入れることすらできない。でも今日はちがう。小指にくくりつけた風船が力をくれる。今まで聞こえていた友達の声が「無」になった。思いつきり右足をけり上げた。ふわっと両足が持ち上がるのを感じた。まるで宇

宙船に乗った気分だ。次の瞬間、校舎が逆さまになり、順番を待つ友達のかつひもがゆるんでいるのが確かに見えた。おなかに鉄棒が食いこんだのも一瞬だった。景色が元にもどると、友達の歓声が聞こえてきた。奈々はなんでもできる気がしてきた。

校庭のすみにある水飲み場で、三年生の男の子が、三人の友達に囲まれて泣いていた。いつもなら、下を向いてじっと時が過ぎるのを待つだけだったが、今の奈々はちがう。

「何やっているの？」

奈々の大きな声におどろいた三人は、その場からあつというまに走り去った。男の子はすっかりえがおになっていた。

「その風船、いいな。」

「見えるの？」

「見えるよ。真っ赤な風船、ほしいな。」

小指の糸をはずして、男の子の小指にくくりつけてあげた。はねるように走っていく男の子のあとを、赤い風船が背中をおすようについていく。

そのよくじつの学級会。

「練習方法は、みんなで決めたいです。」

学級会で奈々はまっすぐ前を向いて提案した。こわばったほおが痛いほど熱い。視線を夏希に移すと、意外なことに夏希は笑っていた。

「ありがとう、奈々ちゃん。いつもみんな何も言わないから、私ばかりしんけんに考えているのかなって思ってた。」

固くにぎりしめていた両手の力がゆるんだ。

「そんなことない。今までちゃんと言えなくって、ごめんね。」

クラスのみんなも声をあげた。

「しんけんに考えよう。最高の運動会にしようよ。」

六年一組を新しい空気が包みこんだ。

校庭では、赤い風船をつけた男の子が、八十メートル走のスタートラインに立っていた。風はどこまでもやさしくふいている。

